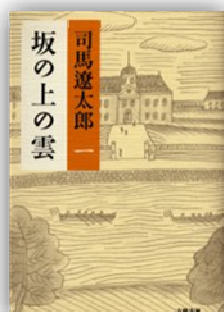




「生物と無生物のあいだ」 福岡伸一 著（講談社現代新書） 瀧澤 泉(実習助手)

この本は分子生物学に関わった科学者を紹介しながら、「生命とは何か」という問いに迫ります。教科書的ではなく、人間ドラマを交えながらなので非常に読みやすいです。例えばワトソンとクリック。生物の教科書には「DNA が2重らせん構造であることを発表した」とさりりと書いてありますが、実際にはライバルチームの研究資料を参考にしたことにより、DNA の2重らせん構造を発見したようです。もしかしたらライバルチームが2重らせん構造を発表していたかもしれません。しかし科学の世界では、発表した者に功績が与えられます。それ以外の研究者には光が当たらないのです。

冒頭で野口英世に触れています。子供の頃何冊か伝記を読んで、おまけにお札にもなり、ものすごい研究者という印象が強かったのですが、この本は野口英世をケチンケチンにしています。野口英世を破天荒な生身の姿として描き直した評伝「遠き落日」(渡辺淳一著、角川書店)を読みたくくなりました。



ご紹介の本はすべて図書室にあります。

「星の王子さま」 サン・テグジュペリ著

「星の王子さま」は単なる児童書ではありません。様々な登場人物の言葉に潜む大人への批判、社会への風刺、愛、純真さなど、作者サン・テグジュペリが発するメッセージを読者が自分なりに解釈しながら読めるところにこの本の魅力があると思います。

物語は、砂漠に不時着したパイロットの「僕」と、小惑星から来た孤独な王子との出会いから始まります。ストーリーの中に登場するおかしな大人たちや、一輪のバラの花、バオバブの木など、様々なものがまるで現実の世界の何かを彷彿とさせます。王子は旅の途中で多くのこと経験し、次第に幸福や愛情の意味を知ります。

「いちばんたいせつなことは、目に見えない」キツネの名セリフです。話の隅々に印象に残る言葉がちりばめられています。古い石の壁に座って、ヘビと話をしている王子の言葉がなんとも切ないです。人として大切な何かを考えさせられる本です。

3 - 3 本川 哲哉

「坂の上の雲」 司馬遼太郎著

明治時代、日本はとても小さな国だった。その国が明治維新を成し遂げ列強と肩を並べようとした。しかし、清とロシアの二つの大国と戦わなければならなかった。日清戦争と日露戦争である。日本がいったいこういった難題に対してどう向かい合い、どう振舞ったのか、当時活躍した三人の男たちを中心に描かれている。

日本陸軍で日本に騎兵という新しい概念を入れロシアのコサック師団を破った、秋山好古。日本海軍で日本の水軍戦術を駆使してバルチック艦隊を破った、秋山真之。日本の俳人で日本のかつての精神を甦らせた、正岡子規。そして、この三人を中心に描かれている大勢の人々。

この本は紀伝体で人物を中心に歴史が描かれていて物語小説のようで登場人物が生き生きと描かれていてとても読みやすく、また、司馬観という独特な見方で描かれているため普通の歴史小説とは少し違う感覚で読むことができます。ぜひ一度読んでみてください。

3 - 3 稲葉 盛文

「スタンフォードの自分を変える教室」 ケリー・マクゴニカル著（神崎朗子訳）

自己啓発本は著者の意見のみが述べられ、結局自分自身に意識の変化ももたらさないということがよくあると思います。しかしこの本はそういう類ではありません。この本の特徴は、本の内容を自分の思考や行動に応用しやすいということです。

みなさんは「ちょっとマンガ読んでから勉強すっか!」と思いつつ「やべえ、全部読破しちゃった!てゆうか明日4STEP提出日じゃん・・・」ということはありませんでしたか?

自分の心を上手くコントロールすることは難しいことです。この本には「意志力」についての内容がベースにおかれ、自分の思考プロセスに新しい視点を与えてくれます。ただ単に読むだけ、という本ではなく、考えながら読む本だと思います。そういう観点から「教室」的な世界を感じることが出来るかもしれません。人は考え方によってどんな状況でも良い方向に変えられる、そう思わせてくれた本でした。

3 - 4 内村 俊哉

「真夏の方程式」 東野圭吾 著

少年・柄崎恭平は両親の都合で親戚の経営する旅館がある玻璃ヶ浦に行くこととなった。恭平は向かう電車の中で、海底鉱物資源開発の説明会に参加する帝都大学物理学教授・湯川学と乗り合わせた。2人は一旦別れたが、恭平が旅館に着くと、湯川も旅館に来ていた。そんな中、普段はあまり客の来ない旅館に、塚原正次という客の予約があった。その夜、正次は旅館から姿を消し、翌朝海辺で変死していた。正次は元警視庁捜査一課で、彼の死に疑問を感じた正次の後輩、そして湯川と大学の同期でもある草薙俊平は旅館にいた湯川の協力を受けながら独自に捜査を進めていく――

このあらすじだけでは誰が主役なのか分かりづらいかもしれない(実際の主役は湯川学だが)。この小説はかなり多方向の視点から描かれているため、あたかも主役が何人もいるように見えてくるからである。

ちょうど今月29日には福山雅治主演の映画が公開される。映画を先に見ても、本を先に読んでも、それぞれに面白さを求められる一冊ではないだろうか。

3 - 4 若林 拓弥